

存在の成就としての救済

——ジョナサン・エドワーズのハビット論——

森本あんり

一九九一年に帰国したとき、「バーチャル・リアリティ」というカタカナ英語が流行しはじめているのを見て驚いた。これは、自分が数年来研究してきたジョナサン・エドワーズという一八世紀アメリカの哲学者の使った言葉だからである。昨今のマルチメディア世相でこれがどのように定義されるか知らないが、エドワーズにおいて「virtual」（彼は「virtual」とも綴る）とは、「actual」に対して、あるものが実際に十全な意味で存在してはいないが、機会が与えられれば必ず現実化するであろうような可能的潜勢的存在のことを意味している。わたしはそれを悩みつづ「構造的存在」と訳したが、活字離れた現代の若者に読んでもらうためには、あるいはカタカナのままの方が通りがよかつたかもしれない。

ジョナサン・エドワーズは、アメリカ・ピューリタニズムの生んだ最大の思想家である。一九三〇年代に起こったピューリタン・ルネサンス以来、エドワーズは神学や哲学のみならず、文学、科学史、社会思想史など多方面にわたって研究材料を提供してきた。彼は、草創間もないイェール大学で学生また教師となり、コネチカット河畔のある有力な町の教会の牧師となり、神学論争の末その教会

を辞して辺境のインディアン寄宿学校の責を担い、晩年はプリンストン大学の第三代学長となった人である。その著作は一九世紀以来何度か編纂されているが、一九五七年以来イェール大学出版会より学問的校訂を経た決定版が順次刊行されつづがある。これは現在二二巻を見たところであるが、さらにあと十数巻の刊行が予定されているという、百年越しの長大な出版企画である。それだけでもエドワーズ研究の意義がうかがわれよう。

ところがこのエドワーズ、少数の研究者は別として、日本ではまだほとんど知られていない。その理由には、基礎史料の一部がまだに未刊行で日本国内では閲覧できないことや、エドワーズの文章が実際に読んでみると古めかしくて難解であることも挙げられるだろう。加えて、神学や哲学や思想史などという分野では、そもそもアメリカに「思想」と名のつくものが存在するかどうかについて、妙に懐疑的な風潮がある。これは何も日本に限ったことではなく、例えばティリヒもアメリカに亡命するときに「自分はこれから荒野へゆくのだ」という悲壮な決意をした、と後に述懐しているほどである。しかし、まさに一八世紀当時の文化の中心であったヨーロッパ

や英国から大西洋を隔てて遠く離れたその「荒野」に、エドワーズは忽然と大輪の花を咲かせているのである。しかもこの花は、周辺との直接的な系譜を超えて、ヨーロッパ・カトリシズムとも、さらには遠く東方教父たちの伝統とも手を結ぶ幽玄な広がりをもった思想である。かつてラインホルド・ニーバーはペリー・ミラーのエドワーズ伝を読んで驚愕し、エドワーズを「辺地の天才 Backwoods genius」と評したが、じつはアメリカ人自身も自己の伝統のうちにもこのような人物がいたことを知って驚いている、というのが実情ではないだろうか。

エドワーズの思想を繙く場合、連続と非連続の両面を押さえておくことが重要である。一方で彼はたしかに他から隔絶した「辺境」にあり、そのゆえに独創的な思想形成をおこなうことができたのだが、その独創性は「辺境」ゆえの「偏狭」さではない。通俗的な理解によれば、エドワーズはピューリタンであり、カルヴィニストであり、プロテスタントである。けれども、彼は一度も自覚的にそれらであろうとしたことはなく、彼の思想もそうした定式的な理解に真っ向から挑戦するものとなっている。そもそも、エドワーズに限らずニューイングランドでカルヴァンがよく読まれたというのには根拠のない通念であって、当時のハーヴァードやイェールの神学教育カリキュラム、またそこで読まれていた大陸の改革派神学などを検証してみると、ピューリタニズムはむしろローマ・カトリシズムの知的遺産にきわめて親和的であり、そこから多くを学び継承していることが明らかになる。エドワーズ研究を機に、ニューイングランドの思想風土そのものをより史実に即して理解し直すべきではない

かと考えている。最近ではさすがにひとところまかり通ったような戯画化されたピューリタン像は少なくなったが、キリスト教思想になじみの少ない本邦では、ニューイングランドはアメリカ研究の中でもいまだ暗がりに置かれたままの領域である。

エドワーズはまた、ミラー以来「ロックとニュートンの上に鏡直されたピューリタン」と評されてきた。それもあながち誤りではないが、彼の本当の関心事はむしろ神学的な存在論にある。がんらいプロテスタントは近世哲学の中ではどちらかと言えば認識論の分野の開拓に貢献しており、存在論はもっぱらカトリック神学の勢力分野である。ところがエドワーズは、新プラトン主義的な神概念とトマス的な救済の概念をもって、存在の成就、人間の自己形成と自己超越、創造世界の完成、などといったテーマを追求した神学者である。エドワーズの語る「救済」とは、ひとくちに言って「存在の成就」である。あるものが本来あるべきところのものになることである。その意味で、「存在」はけっして一面通りではない。そこには構造があり、法則があり、段階があり、可能態と現実態とがある。

これは、存在を *habit* ないし *disposition* として捉える彼独自の存在論の一端であるが、このような存在理解においてエドワーズはアリストテレスやトマスと、また彼以降のアメリカではチャールズ・サンダース・ペースなどと触れ合っている。エドワーズはそこで実体と偶有による当時の存在理解から、存在と行為、存在と生成、質量とエネルギーとを同一の範疇で考える、きわめて現代的な存在理解へと質的な飛躍を遂げている。おおげさに言えば、エドワーズはニュートンではなく *E=mc²* のアインシュタインと同時代人なので

ある。

それだけでも面白いのだが、エドワーズ神学の真骨頂は、ハビットの概念をさらに神の存在にもあてはめて論じた点にある。エドワーズの神は、ハビットとして存在し行為し給う神である。それは、自己充足的に閉塞して虚空に存在する神ではない。完全飽和状態の中に静止して蟄居している神ではない。神は、内在的に完全に充溢しているからこそ不断に外へと赴く神であり、無限に善であるからこそ被造世界を創造し、その存在を基礎づけ、支え、よみし、喜び、そして成就に至らしめる神である。エドワーズの神は、世界に対して開かれている神である。世界の完成と人間存在の成就を志向する神である。ヘーゲル流に言えば、即自的な神から対自的な神へと自己を外化し、そのことによってさらに時間内における自己栄化を達成する神である。

もう一点。しばしばエドワーズは、三歳年下のベンジャミン・フランクリンと並べて、一方は厳格なビュリタンの敬虔の、他方は明朗なヤンキー的実利主義の典型として「アメリカ的性格」の二面性を代表するように描かれてきた。しかし、じつはエドワーズ的なハビット観がフランクリンのプラグマティズムに道を開いたとも言い得るのである。あるときフランクリンが日曜礼拝に出席しないことを妹のジェインに咎められると、彼はエドワーズを引いて、礼拝という外形的なことよりも、善行などの道徳的なつとめに忠実であることが神に喜ばれるのだ、とまったくもろしく論じたという。フランクリンとエドワーズは直接の面識はない。しかし——「背中あわせ」であるとしても——この両者は案外微笑みながら近

いところに立っていたのかもしれない。

ただでさえ目を通すべき書物の多い昨今であるから、拙著を全頁通してお読みいただくことを期待するのは虫がよすぎるかもしれない。著者としては、まずエドワーズに至るまでのハビットゥス概念の変遷を辿った第一章と、内在と経論の三位一体をつなぐ神のハビットとして流出と還流を論じた第七章をぜひお読みいただきたい。他に、カトリック神学とのエキクメニカルな折衝に興味のある方には、義認論の体系比較をおこなった第五章と、トマスとロンバルドゥスとを対比して論じた第三章を、エドワーズのアメリカ的な文脈に興味のある方は第四章や第六章を、また一七—一八世紀の知性論や意志論に興味のある方は第二章をお読みいただきたい。拙著をきっかけに、エドワーズ的な意味で神学に「インタレスト」をもつ方が少しでも増えるならば幸いである。

(もりもと・あんり 国際基督教大学大学教師／神学)

森本あんり

ジヨナサン・エドワーズ研究

アメリカ・ピュリタニズムの存在論と救済論

(内容) 序章 エドワーズの思想史的位置／第一章 傾向的存在論／第二章 回心 注入の恩恵／第三章 回心 新しい内的原理／第四章 義認 神の賜物の冠／第五章 義認 体系的比較／第六章 聖化 回心と義認の継続／第七章 栄化 創造の究極目的／終章 エキクメニカルな救済論の構築にむけて

一九九五年七月刊／A5判 56頁・八五〇〇円